

【ポスターセッション】

インドネシア・バリ島の「ろう者の村」としてのブンカラ村の現状と実際

— 「Kata kolok」の歴史と村の経済という二つの側面に着目して—

○ 花園大学 氏名 笹谷絵里 (009142)

キーワード3つ：インドネシア 手話 聴覚障害

1. 研究目的

インドネシアのバリ島北部シガラジャの近くにあるブンカラ村では、約3000人の村人うち約1割の人々は耳が聞こえないとされる。だが、村人の9割が手話を話せ、学校でも全ての授業に手話通訳がつく。ブンカラ村は村人すべて手話が使え、Kata kolokという手話が長年使われている。それは「ろう者の言葉」という意味の「Kata kolok」という手話で、バリ島北部のブンカラ（Bengkala）村で何世代にもわたって使用されてきた。これは国際手話（SIBI）やインドネシア（Bisindo）の手話とは異なる形のローカルな手話である。村民たちは高い確率（約1割）で耳が聞こえないため、この「Kata kolok」が主要なコミュニケーション方法として使用されている。Bengkalaはバリ語で「Desa Kolok」（ろう者の村）とも呼ばれる歴史がある。そのため、すべての人が手話を使えるようになった歴史と現在の状況を明らかにし、なぜ、すべての人が手話を使えるということができたのか。村人たちは手話ができることをどう考えているのかを明らかにすることが本研究の目的である。

2. 研究の視点および方法

本発表は、従来の先行研究の知見を踏まえたうえで、ブンカラ村の「Kata kolok」に関して、歴史と経済という二つの側面を中核とし、それらを規定する重層的要因を織り込んだ研究視点から分析を行う。本発表は、マジョリティー（聴者）がマイノリティー（ろう者）に合わせるのがなぜ可能なのか、このようなシステムがなぜ構築可能だったのか、また村の人はそれに対してどのように考えているのかを重層的要因から明らかにしたい。

障害者の権利に関する条約第24条では、「インクルーシブ教育システム」（inclusive education system）とは、人間の多様性の尊重等の強化や障害者が精神的及び身体的な能力等を可能な最大限度まで発達させ、自由な社会に効果的に参加することを可能とする、との目的のもと、障害のある者と障害のない者が共に学ぶ仕組みである。障害のある者が「general education system」から排除されないこと、自己の生活する地域において初等中等教育の機会が与えられることで、個人に必要な「合理的配慮」が提供される等が必要とされているものである。このような規定された状況以外で、インドネシアの小さな村がどのような取り組みを行い、世界的に注目を浴びる状況となったのかを現地でのフィールド

ドワーク及びインタビュー調査から分析する。本発表のインタビュー調査の詳細については以下の通りである。調査時期は2019年1月20日から31日までの11日間である。ブンカラ村及びバリにある特別支援学校（聴覚、自閉、知的など）を訪問し実施した。インタビュー対象者について、ブンカラ村では、小学校教員、村人、聴覚障害を持つ当事者へのインタビューを実施した。バリにある特別支援学校では、校長および教員数名にインタビューを実施した。

3. 倫理的配慮

倫理的配慮として、日本社会福祉学会の倫理指針を遵守し、被調査者に対して事前に研究の概要を説明し、個人情報保護等の取扱いに関する説明をインドネシア語（通訳を介して）で実施し、同意を経たのちに、「立命館大学における人を対象とする研究倫理指針」に従ってインタビューを実施した。

4. 研究結果

主な研究結果として、第一に「Kata kolok」は簡単で理解しやすい手話であるため、挨拶や簡単なやりとりは容易である。だが、村人の9割が手話を使用できるのではなく、あいさつ程度の手話が理解できるのが9割であり、Kata kolokを使用して会話が可能とされる村人の多くは、親族にろう者がいるものがほとんどであった。また、村内のろう者は、同じ部落に住み、ろう者同士でコミュニケーションをとる傾向があることが明らかになった。第二に学校でも全ての授業に手話通訳がつくとのことであったが、現在、村の小学校に在籍しているろう者の児童は3名であり、村に住んでいる児童は1名のみであり、他の2名は村外から通学していた。また、通常の授業は聴者とろう者は分かれて授業を受けており、一緒に授業を受けているわけではないことも明らかとなった。

5. 考察

本発表では、ブンカラ村の「Kata kolok」に関して、歴史と経済という二つの側面を中核とし、それらを規定する重層的要因を織り込んだ研究視点から分析を行った。歴史として、ブンカラ村のろう者は遺伝性のろう者であり、家族内にろう者と聴者が混在している。さらに8世代前から遺伝性のろう者が存在しており、すでに北米の大学によって調査されていると回答された。さらに、ろう者が村外から訪れることや定住することに寛大な村民性があり、インタビューからも「ここでは差別がない」と語られるなど、耳が聞こえる/聞こえないということが重要視されない村民性が明らかになった。一方で、世界的に注目され、多くの研究者や観光客が訪れる観光地として、対外的にアピールされている面もあり、現在、世界的に認識されている「ブンカラ村」の現状と実際の実情には乖離する部分が少なくないことが明らかになった。